

國學院大學学術情報リポジトリ

談話室「千の風」考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 粟田, 義彦, Awata, Yoshihiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000090

「千の風」考

栗田 義彦

私事で恐縮ですが、私は今年〈古希〉を迎えました。今では男性の七〇歳と言えば、平均寿命以下ですから珍しいことではありません。しかしながら個人的には、〈我が人生、思えば遠くへ来たもんだ〉の心境です。そんな精神的な状態が常々内奥にあるせい、最近新聞に折り込まれる葬儀関係のチラシがやたらと気になります。この種のもの結構多いものです。

そしてそれらのチラシの中に「千の風」と銘打った葬儀関係のものが頻繁に目につき始めました。そこでインターネットで改めて検索してみますと、「千の風」という名称がついたものが続々出てきました。葬儀社、葬儀場（ホール）、葬儀保険、葬儀セレモニー等々、様々なものにそれは使われています。我が国においては、「千の風」という言葉は、既に葬祭を生業とする人々には欠かせぬものになりつつあるようです。

このような風潮が生じた背景は言うまでもなく、秋川雅史さんがNHKの紅白歌合戦で何度か「千の風になって」（訳詩、作曲・新井満）を歌い、それが大ヒットしたことにあるのでしょう。それをきっかけに「千の風」という言葉が、我が国の人々に広く知られるところとなりました。

メロディーのすばらしさは言うに及ばず、その歌詞の意味するところが人々の死生観に共振したのかもしれない。「千の風になって」は、英詩 A Thousand Winds（作者不詳）の訳です。

この詩は、これまでに特に欧米で様々な場面で朗読されてきました。近くは、アメリカで起こった三・一一同時多発

テロの翌年に、グラウンド・ゼロの地で追悼式が催されましたが、その時に犠牲者となった或る方の娘さんがこの詩を朗読しました。我が国でよく知られるようになったのは、それ以降のようです。

さて新井満氏の訳ですが、それは、死者がこのされた生者に対して（私は眠ってなんかいません。死んでなんかいません。千の風になって、あの大きな空を吹きわたっています。……）と語りかけます。新井氏の訳は、原詩とはニュアンスがいくらか異なっているように思われますが、細かいところは抜きにしてみれば、この詩は死後に死者は「千の風」や「ダイヤのような煌めき」、「陽の光」、「秋の雨」、「鳥の群れ」、「瞬く星々」等に身を変えて生きています、というメッセージです。

このような様々な自然の事物に身を変えて生きるということはどういうことなのか。既成の宗教の世界観とはかなり異なるようです。新井氏は、まず「風」を命の原理としての「氣息」と捉え、次いでこの「氣息」が種々様々な事物に生まれ代わると解しておられます。つまりこの詩に一種の「アニミズム」を見えています。（参照：新井満著『千の風になつて』講談社、二〇〇三年）

さて皆さんはどうでしょうか。私は授業で哲学概論を講じておりますが、「原子論」をテーマとして取り上げる時に、この詩の原詩（英語版）と新井氏の訳を紹介しています。そしてこの詩を原子論的立場から解釈したらどうであろうか、と問いかけます。勿論、他の立場からの解釈も可能です。要するに各々が自らの頭で考えて、この詩を改めて味わってみて欲しい、そしてこの詩が何故我が国ばかりでなく、世界的にも受容されているのかを顧みて欲しいと訴えます。

振り返れば、近年、我が国では、葬儀の形態もかなり多様化してきました。小規模な家族葬、自由葬とも言うべき無宗教の葬儀、散骨葬や樹木葬のような所謂自然葬等々。一時代前と比べれば、事の善し悪しは別にして、葬儀の形態が急速に変わりつつあるのを実感します。精神風土の変容が徐々に進んでいるのかも知れません。「千の風」の登場が、この変化と軌を一にしているように思えてなりません。

（西洋近世哲学・倫理学・生命倫理）